

文 献

田林 明編 (2013) 『商品化する日本の農村空間』 農林統計出版。

山下清海編：『改革開放後の中国僑郷－在日老華僑・新華僑の出身地の変容』 明石書店，2014年12月刊，278p.，5,000円（税別）

本書は、長年にわたって世界のチャイナタウンを精力的に研究してきた山下清海氏を中心に、その研究視点をチャイナタウンから僑郷に移して研究した成果をまとめたものである。「僑郷」とはいささか聞き慣れない言葉であるが、本書によれば「中国国内において海外移住者を多く送り出した地域は、『華僑の故郷』という意味で、中国では『僑郷』と呼ばれている」という。

エスニック・マイノリティに関する研究においては、チャイナタウンをはじめとする移民の定住地に関する研究が盛んであり、移民を送り出した地域、すなわち移民母村（あるいは出移住地域）に関しては定住地ほどに関心が払われてきたとは言いがたい。しかしながら、移民母村は移民からの海外送金の受領や移民の海外からの帰還によって変容を遂げることが知られており、これらの研究の必要性が課題であった。

本書は「第Ⅰ部 中国人の海外移住と僑郷」、第Ⅱ部 福建省福清の僑郷」、第Ⅲ部 浙江省温州近郊青田の僑郷」、第Ⅳ部 中国東北地方の僑郷」、第Ⅴ部 中国僑郷と新華僑－世界と日本－」の5部構成となっている。

第Ⅰ部は3章から成り立っている。「第1章 僑郷研究の視点」（山下）では、僑郷を生み出す地域的条件を見出すこと、そして諸条件の相互関係を重視しながら総合的に考察していくことのできる人文地理学的研究の重要性と可能性を指摘した

うえで、人文地理学に限らず僑郷に関する研究の蓄積を俯瞰している。「第2章 グローバル化と人の移動」（小木裕文）では、過去数百年に渡り中国から世界各地へと数千万の人びとが世界各地へと移動し、移動先でチャイナタウンなど彼ら独自の相互共同体を築いていく。その際、単に移動先と僑郷が結ばれるのではなく、国境を越えた他の移動先との間にもネットワークができる。このネットワークが海外移住を望む華人にとって、移住先の確保と生存発展の可能性を保証していると、今後ますます華人は世界各地へ移動していくであろうと展望している。「第3章 中国の労働力輸出」（杜国慶）では、まず国内において農村から都市への労働力移動が起こっていることに触れ、農村の余剰人口と都市の雇用機会のギャップが1,200万人以上にものぼると試算している。そして、こうした余剰労働力が海外へと移動する動きもみられるとしている。それを可能たらしめているのが労働力海外送出制度であることから、その制度と枠組みについて詳述したうえで、統計データを駆使して中国の労働力送出先について論じている。

第Ⅱ部もまた3章から成り立っている。「第1章 福清僑郷と福清移民ネットワーク」（小木）は、世界各地に移住する華僑・華人のなかでも全体の約3分の1を占めると推定される福建省出身者の事例研究である。福建省出身の華人は福建人、福州人、福清人、興化人、客家人に大別できるが、本章では福清人を対象としてその僑郷と移民ネットワークについて述べている。「第2章 在日老華僑および新華僑の僑郷としての福清」（山下・小木・松村公明・張貴民・杜）では、「老華僑」（1972年の日中国交正常化以前から在留している華人）の伝統的な僑郷としての福清の地域性について述べたうえで、「新華僑」（1972年以降に来日した華僑）の日本渡航の過程、滞日生活の状

況、さらには新華僑が福清に及ぼした影響を描き出している。「第3章 僑郷における農村景観と農業－福建省福清市を例として－」（張）は、福清のなかでも農村地域に焦点を当てた事例研究である。福清の経済は地域内では主に建築業、地域外では主に出稼ぎによる送金に依存しており、このため農業経済は衰退を余儀なくされているという。特に、農業の担い手不足は深刻であり、農作業が高齢者と福清以外からの出稼ぎ労働者によって支えられている実態が浮き彫りにされている。そのような実態は粗放的な土地利用や耕作放棄地などの景観として現れている。

第Ⅲ部は2章から成り立っている。「第1章 世界の中の温州人」（山下）は、福建省、広東省、海南省と並んで海外移住者送出してきた地域である浙江省温州および青田の人びとに焦点を当てている。温州人（青田出身者を含む）は海外の華人社会において商才にたけた商人として知られており、第二次世界大戦以前から移住者の多かったフランスから、改革開放後は南ヨーロッパへと、ベルリンの壁崩壊後は東ヨーロッパにも進出していることが報告されている。「第2章 温州近郊青田県の僑郷－日本老華僑の僑郷からヨーロッパ新華僑の僑郷へ－」（山下・小木・張・杜）は、日本に在留する老華僑を多く送り出してきた地域でありながら、現在は世界各地へと送出地域を拡大している青田を事例とした研究成果である。改革開放後、青田では出国ブームが起り、多くの人が海外へ渡ったが、なかでもヨーロッパへの渡航者が目立った。ヨーロッパ在住者やヨーロッパからの帰国者は青田の経済や景観だけでなく、人びとの習慣をも変えている。

第Ⅳ部は3章から成り立っている。「第1章 中国残留帰国者の僑郷－黒竜江省ハルビン市方正県－」（山下・小木・張・杜）では、中国南部に位置する広東省、福建省、海南省、浙江省といった

伝統的僑郷を有する地域とは異質な中国東北地方の僑郷についての論考である。僑郷としての方正県は日清戦争および満州国という歴史的要因によって形成された特異な僑郷である。筆者たちは、比較的新しいこの僑郷がいかにして形成されたのかを明らかにした。「第2章 海外出稼ぎに伴う僑郷の留守児童問題－吉林省延辺朝鮮族自治州－」（尹秀一）では、中国の55の少数民族のうちの一つである東北3省（黒竜江、吉林、遼寧）を中心に居住する朝鮮族を対象とし、海外出稼ぎによる留守児童問題を中心に朝鮮族の僑郷について考察した。中国の朝鮮族社会では1980年代まで吉林省を中心に東北地方への移動が主であったが、1990年以降に韓国や日本をはじめとした海外や、国内でも発展著しい大都市を目指す移動が増加したという。それに伴い留守児童も増加し、2000年代には自治州政府も留守児童を対応すべき問題として「学生の家」を設立するなどしているが、抜本的な解決には至っていない。「第3章 吉林省延辺朝鮮族自治州における僑郷の国境観光」（松村）では、在日新華僑の送出プロセスを背景として、延辺朝鮮族自治州が有する国境地域および僑郷としての地域特色を、国境観光に焦点を当てながら地誌的に記述している。

第Ⅴ部は本書のまとめとなっている。改革開放後、中国の伝統的な僑郷は伝統的な移出先だけでなく、新華僑を新たに海外の各地に送出するようになり、老僑郷は海外在住者からの送金や投資で急速に発展していったこと、そして新しい僑郷も中国各地に出現してきていると結んでいる。

以上が本書の概要である。本書は「改革開放」、「老華僑」、「新華僑」、「僑郷」などをキーワードとして、文献調査、統計資料、現地調査などから僑郷の変容を明らかにしようとしたものであり、地理学のみならず、中国地域研究にとっても意義深い。欲を言うならば、第Ⅴ部が各章のまとめに

終わらず、僑郷の分類ごとに僑郷変容の構造図を提示するなどは考えられなかったであろうか。研究全体としては、福建省の福清と福州、浙江省の青田と温州の比較研究によってより事例を一般化することはできなかったのであろうか。こうした点が惜しまれるが、資料収集に制約の多い中国を研究対象地域として、これまでエスニック研究に欠けていた移民母村の実態を付与したことは大いに評価できよう。

(大島規江)

佐々木博編：『最後の博物学者 アレクサンダー＝フォン＝フンボルトの生涯』古今書院，2015年8月刊，262p.，5,400円（税別）

本書は、巨人アレクサンダー・フォン・フンボルトの生涯を丹念に描いた一代記である。知の巨人・フンボルトの名はあまりに有名であるが、その一方で89年にわたる豊饒な彼の生涯について、日本語で読むことのできる伝記の類いは僅少である。「科学の帝王」、「近代のアリストテレス」、「最後の博物学者」、「地球学の開祖」、「ゲータを継承する自然科学者」など数々の異称をもつフンボルトは、地理学者の範疇に収まりきれないがゆえに斯界における傑出したスターといえるが、本書はフンボルトのこうしたアクティブな生涯の魅力をあますことなく伝えてくれる。

本書についてはすでに優れた書評も発表されており（大嶽2015）、評者の紹介はいささか蛇足の感はあるが、まず簡単に各章の内容を紹介しよう。

1章（本書ではローマ数字のI，以下同じ）「今なぜアレクサンダー＝フォン＝フンボルトか？」では、フンボルト家および生涯のあらましが整理される。周知のようにフンボルトの多くの著作はフランス語でなされている。当時のプロイセンの政治体制に反発したフンボルトは自由なパリに憧

れ、『新大陸の熱帯地域への旅行（全30巻）』もパリで書かれた。一方で著者は、フンボルトを真正銘のプロイセン人であったとし、その根拠として、①質素な生活スタイル、②自立意識、③強い意志、④勤労意識、⑤時間の正確さ、を挙げる。この偉大なる「科学者」を育んだ環境と旺盛な好奇心、冒険心の源は何か、人間形成の視点から本書ではフンボルトの生涯が描かれていく。

2章「灰色で友だちもいない幼少期」では、ベルリンに生まれたフンボルトが3人の家庭教師のもとで学び、とくに3人目の家庭教師であったクントの薫陶を受け、兄・ヴィルヘルムとともにサロンで自由な雰囲気に触れていく様子が描かれる。

3章「四つの大学で勉学」は、フランクフルト（オーデル）、ゲッティンゲン、ハンブルグ、さらにフライベルクでの学生時代のエピソードである。フランクフルトでは、身体を鍛えるとともにギリシャ語、ラテン語、数学、植物学、絵画などを独習した。ゲッティンゲンでは、法律学を中心に哲学、文学、古典語を熱心に勉強するとともに、ライン川沿いの旅に出かけた。親友となるフォルスターとの出会いもこのときである。母親の意向もあり商科大学（ハンブルク）や鉱山大学（フライベルク）で実学を学ぶものの、旅を日常とし、自然の相貌とその構成原理に魅せられていく姿が生き生きと描かれる。孤独を愛し、一人自分の「思考の作業場」で粘り強く勉強する姿がほほえましい。

4章「鉱山官時代」では、鉱山大学を卒業後、鉱山官として奮闘した若きフンボルトが描かれる。私費で鉱山労働者訓練学校を開設し、若干25歳にして、上級鉱山監督官に昇進する。鉱山で働きながら同時にそこで自分の研究を続けていた。ゲータとの交友が生まれたのはこの時期である。また鉱山官時代に、4か月を超えるアルプス調査旅行に出かけている。地球物理や大気、博物